

e-dream-s 通信

No. 129 発行：2012年2月12日 特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

Cam TESOL への準備が進んでいます。初参加者の声をお届けします。応援しましょう！

目次

1. CamTESOL 間近	中川 房代	p. 2
2. 楽団イー・ドリームズ	辻 荘一	p. 4
3. アメリカ西海岸2012: ワインとスーパーボウルとセグウェイと	井川 好二	p. 6
4. 二度目のカンボジア訪問	室山 佳子	p. 14
5. Cam TESOL に向けて	佐藤 由美子	p. 15
6. 「被災地支援ツアー」への思い	仙崎 裕右	p. 16
7. 新しいプロジェクト	山田 昌子	p. 18
8. いつか来た道	塚本 美紀	p. 20



2011年 Cam TESOL での中川さん、Brian さん、辰巳さんによる発表、「Rhythm and Intonation」の様子

CamTESOL 間近

中 川 房 代

「CamTESOL 2012」の開催まで、2週間となった。ACROSS・e-dream-s の代表がこのカンボジアでの英語教育学会 CamTESOL に参加するようになって、今年で5回目となる。これまで、英語教師の実態の分析や、教師の資質向上や生涯教育としての発音訓練や研修についての発表、授業実践の発表などを、ワークショップ・学術研究発表の形で、11 のプレゼンテーションを行ってきた。今回も2つの発表を準備中である。

既に、今年のカンファレンスでの発表スケジュールが決まり、それによると、2本ともが2月 25 日（土）の午後に行われる。

・ 14:55 - 15:40

“Establishing a model of English pronunciation for NNSs: Phonetic training for non-native teachers of English”

(HAIDA Yuzuru, SATO Yumiko & MUROYAMA Keiko)

・ 17:00 - 17:45

“Internet use and e-mail communication in English by EFL teachers”

(IGAWA Koji & NUSPLIGER Brian)

日本とは2時間の時差があるので、日本では 25 日の夕方から夜にかけての時間帯の発表となる。発表される皆さん、頑張ってきてください！
残念ながら今回参加できない皆さん、日本からしっかり応援しましょう！

昨年、CamTESOL のサイトがリニューアルされ、Facebook ととも連動して、より多くの人々が双方向で参加できる形で公開されている。カンファレンスは、毎年、回を重ねる毎に参加者が増え、参加国も増えている。今年のテーマは、“Language and Development”。進化を続ける今年のカンファレンスが楽しみである。ホームページには開会式や閉会式での講演者やその他様々な情報がアップされているので、今回参加しない皆さんもぜひ CamTESOL のサイトにアクセスしてみてください。

<http://www.camtesol.org/>

昨年のカンファレンスの公式報告の中に、私たちが写っている写真もあるので、こちらをご覧ください。私たちは、毎回、着物や浴衣で Conference Dinner と呼ばれるパーティに参加してきた。それで、今年はカンファレンス参加者宛の情報の中に、「Conference Dinner には、お国の衣装で来られるといいですよ」という文言も入った。こんなところでも、私たちの連続参加の軌跡が見られる。

<http://www.flickr.com/photos/camtesol/sets/72157626102740537/>

<http://www.camtesol.org/index.php/2012-conference/conference-dinner>

カンファレンス後には、昨年10月に“教科書支援プロジェクト”で、教科書を贈った学校を訪問し、生徒たちが教科書を使って授業を受けている様子なども見てくる予定である。昨年、日本での留学を終えてカンボジアに帰国した Ponleu さんや Sopa さんの協力で、様々な準備が進んでいる。今年度、新たな学校で教科書支援プロジェクトを実施する予定であるが、具体的にどんな風に進めれば効果的にできるか、などを検討する材料にできたらと考えている。

話は変わるが、1月の理事会で決定されたもう1つの課題は「東日本大震災支援プロジェクト」である。実際に、現地に行って自分の目と耳、身体で感じてこよう！と、東京の岡田理事を中心に東京の会員がコンタクトをとり、支援ツアーの計画を進めている。

先日の事前アンケートの結果、

3月23日（金）夜～25日（日）夜、または

3月24日（土）夜～26日（月）夜

のどちらかの期間の、2日間または3日間の予定で支援ツアーを実施したいと考えている。要項が決まり次第、参加者を募集するので、予定に入れておいてください。

新しい年が明けて2か月、奮闘が始まっています。一緒に頑張っていきましょう！

楽団イー・ドリームズ

辻莊一

家族でピアノが弾けないのは私だけである。妻は一時は大学もピアノで行こうと思っていたぐらいの腕だし、3人の子供達（全員すでに二十歳を超えているので子供ではないのだが）も小学校まではピアノの先生ついて習っていたので、ある程度弾ける。私は弾けない。私の弾けるのはギターだけである。

最近娘の一人が、突然ギターに興味を持ちエレキギターを手に入れ、練習を始めた。ギター教室に通っているわけでもなく、ネットで弾き方を検索したり模範演奏を YouTube で観たりしながら練習しているようだが、結構苦勞しているようだ。

先日ギターのコードのことを教えて欲しいと言われちょっと解説したのだが、同じ音楽とは言いながら楽器が違うと全く勝手が違うようで、なかなかしっくりこないようである。例えば、ド・ミ・ソの和音とレ・ファ[#]・ラの和音は、ピアノでは全く違う音と指使いであるが、ギターではド・ミ・ソの和音を作る指の形を変えずにそのまま2フレットずらせばレ・ファ[#]・ラになる。同じ高さの音が複数のポジションで出ること、納得がいかないようである。右手と左手でひとつの音を出すというのも、違和感があるようだ。



逆にピアノの弾けないギター弾きから言わせてもらえば、ピアノを演奏できるひとは超人のように思える。右手左手がバラバラに動いて別の音を出しているのは信じがたいことである。さらに同じ弦楽器でもフレットのないバイオリンやチェロで正確な音程が出せるのも、天才のように思える。

トランペット演奏もそうだ。たった3つしかピストンがないのにどうしてあんな音域の広い音が出るのか謎である。どんな楽器が得意かというのは、最初に手にした楽器が何かということもあるけれど、人によっても向き不向きがあるようにも思える。

楽器によって演奏できる音楽にも、向き不向きがある。ピアノでは全く簡単な曲でもギターとなると超難曲になるものは多い。ギターで弾いたら味があるけどピアノで弾いたら何の面白味もないという曲もある。

よく言われることではあるけれど、楽器の違いはまるで人間の個性の違いのようでもある。個性が違うと仲が悪いかということそうでもなくて、個性の違う楽器が集まってバンドを作ればひとつの音楽を奏でる事ができる。もちろんバンドがソロ楽器よりも優れた音楽を作れるというわけでもないが。

音楽に例えれば NPO の活動はソロ楽器では奏でられない種類のものである。だから NPO 活動をする e-dream-s はバンドである。NPO の活動は、それぞれの楽器が持分をしっかりと守って得意の部分を出して、しかもテンポと音程を合わせて演奏して始めて音楽となる、そんな活動だと思う。音楽はなくても世界が終わるわけではないけれど、音楽によって救われる人もある。NPO も然り。

いいバンドになりたいものである。

アメリカ西海岸2012: ワインとスーパーボウルとセグウェイと

井川 好二



シアトル空港のワインバー “Vino Volo”¹

- 第1日目：2012年2月5日（日）

関西空港から10時間のフライト、ようやくシアトルに到着する。ここからまた乗り継ぎだと思いと、余計に長く感じられるが、目的地サンフランシスコまで、もうすぐ。

乗り継ぎには、2時間以上あるので、以前にも行ったことのあるワイン・バー “Vino Volo” へ行って腰を据える。ソノマ²・ナパ³のメルロー⁴にチキンサラダ。落ち着いた店内で、粹な中年黒人の

¹ Vino Volo aims to revolutionize how people experience wine. Each store is a comfortable post-security retreat for air travelers, combining a cozy wine lounge, restaurant, and boutique wine shop. Vino Volo (derived from "wine flight" in Italian) offers wines from around the world by the glass, in tasting flights, and by the bottle for guests to take home or have shipped. Operating successfully in airports across the nation, Vino Volo is the only airport wine bar and wine retail concept with a depth of experience and a proven track record. <http://www.vinovol.com/>

² Sonoma County [sə' nōmə] a county in northwestern California, known for its wineries; pop. 388,222.

(OAD)

³ A city of western California north of Oakland. It is a center of the Napa Valley, a mountainous region that is famous for its vineyards. Population, 61,842. [AHD3rd]

⁴ mer·lot メルロー 《Bordeaux 原産のブドウの品種(を原料にした辛口赤ワイン)》 [株式会社研究社

ウエイターが応対してくれて、ワインもサラダもなかなかいける。

WiFi⁵が無料なのがうれしい。旨いワインを飲みながら、メールができる幸せ。さっそく持参のラップトップを取り出して、インターネットに接続する。

シアトルのようにそれほど大きくない国際空港の国内線乗り継ぎターミナルに、結構いけるワインとそれにあう軽食を出すバーがあって、客はそこでゆったりソファに座って、ワインとチキンサラダとインターネットを楽しむことができるのは、アメリカの豊かさである。日本じゃこうは行かないと、悲しい思いが心をよぎるが、あまり考え過ぎないようにしよう。

ちなみに、この店ではワインも買える。西海岸、東海岸を中心に、全米で10カ所以上の空港で営業中。

入り口に近いソファ席に座った女性客から、「もういっぱい頂戴！」の音が聞こえてくる。ボウタイの黒人ウエイターが、「あいよ」とばかりに白ワインのグラスを運んでいく。それじゃ、こっちも「もういっぱい」と云いたくなって、今度は、同じ赤でも、地元ワシントン州産のテンプラニーニョ⁶にしよう。

シアトルから約2時間のフライトで、サンフランシスコ空港に着く。訪問先がチャーターしてくれたLincoln Town Car⁷に乗って、ゴールデンゲートブリッジを渡り、サンラファエロ⁸のホテルに入る。もう何回も泊まっているFour Points by Sheraton San Rafael. ハイウェイ101⁹で、サンラファエロの街を過ぎると、丘の上に見えてくる。

世界的ホテルチェーンのシェラトンがプロデュースするモーテルの高級版という感じで、フロントには暖炉の火がパチパチと燃えている。各部屋のWiFiがHigh Speedとうたってはあるが、かなり遅かったりするのを除けば、キングサイズのベッドも、朝食バイキングも、快適なビジネスホテルである。

リーダーズ+プラス V2]

⁵ ◆WiFi (Wireless Fidelity) 高速ワイヤレス・インターネット・アクセス・サービス。[現代用語の基礎知識 2008]

⁶ Tempranillo: a variety of wine grape grown in Spain, used to make Rioja wine. · a red wine made from this grape.

⁷ The Lincoln Town Car is a full-size luxury sedan that was sold by the upscale Lincoln division of Ford Motor Company; it was produced from 1981 to the 2011 model years. Often converted into a stretch limousine, it is the most commonly used limousine and chauffeured car in the United States and Canada. (Wikipedia)

⁸ San Rafael |, san rə' fel| a city in northwestern California, on San Rafael Bay, north of San Francisco; pop. 48,404. (OAD)

⁹ U.S. Route 101, or U.S. Highway 101, is an important north-south U.S. highway that runs through the states of California, Oregon, and Washington, on the West Coast of the United States. It is also known as El Camino Real (The Royal Road) where its route along the southern and central California coast approximates the old trail which linked the Spanish missions, pueblos, and presidios. (Wikipedia)

● 第2日目： 2012年2月6日（月）

アメリカ2日目。6時起床。くもり。

昨日の夜、ホテルのレストランで一人夕食を摂っていると、男達が大声で言い争っているのが耳に入って驚いた。

レストランの隣はスポーツバーになっていて、この日、2月5日は、アメリカンフットボールの頂点を決めるSuper Bowl¹⁰の日：SUPER SUNDAY! 今年は、New York Giants¹¹ vs. New England Patriots¹²。東部の2チームの戦いである。

Super Bowlは国家的盛り上がりを見せるイベントで、ハーフタイムのショーには、毎回豪華シンガーが出演するので有名。今年は、マドンナ。普段は静かなスポーツバーは、中年の男たちの熱気で異様な盛り上がり。大型テレビに映る試合の中継に一喜一憂している。どうやら、Giantsのファンが多いようだ。

しかし、今、男達の大声は、試合とは関係がない。酔っばらった数人が立ち上がり、2~3歳の女の子を抱いた男と、言い争っている。シーンとなったレストランの、私のテーブルにもはっきり聞こえる罵りの応酬がしばらく続き、ホテルの担当者が数名やって来て、ようやく収まった。

¹⁰ Super Bowl [the ~] スーパーボウル《NFLのチャンピオンを決めるプロフットボールゲームで、米国スポーツ界最大のイベント；レギュラーシーズンの終了後、AFCおよびNFCの各8チームがプレーオフに進出、トーナメント形式で両カンファレンスの優勝チームが決定し、毎年1月の最終日曜日に対決する；この日は全米が熱狂することから`Super Sunday'と呼ばれる》；最大の競技会[イベント].[リーダーズプラス]

¹¹ 【フット】 New York市にほど近いNew Jersey州East RutherfordにあるGiants Stadiumを本拠地球場とするNFL球団；NFC東部地区所属；1925年創立；NFL選手権1927, 34, 38, 56年優勝, Super Bowl#に1986, 90年優
[株式会社研究社 リーダーズ+プラスV2]

¹² The New England Patriots, commonly called the "Pats," are a professional football team based in the Greater Boston area, playing their home games in the town of Foxborough, Massachusetts at Gillette Stadium. The team is part of the East Division of the American Football Conference (AFC) in the National Football League (NFL). The team changed its name from the original Boston Patriots after relocating to Foxborough in 1971, although Foxborough is a suburb of Boston, 22 miles (35 km) away. (Wikipedia)



Super Bowl 2012 でのマドンナ¹³

ホテルのマネージャーが、子どもを抱いた男を、酔っぱらいと引き離しながら、どちらのお部屋のお泊まりですか訊いて、男は「こいつらの前では絶対言わん！」と叫ぶのを、マネージャーが「それでは、あちらでお伺いします」と裏手へ連れていき、この場はひとまず片付いた。男の方にはなにか事情があるのかも。

ウエイトレスに何があったのときくと、父親と一緒にスポーツバーにやってきた、そのピンクの服を着た2～3歳の女兒が、父親がどこかへ行っている間に、酔っぱらいの中年男達の声援にあわせ、テレビの横のソファをトランポリン代わりに、大声を上げてジャンプしだした。興奮しバランスを失ってソファから落ちそうになったので、男達の一人が抱きとめた。そこへ父親が帰って来る。女兒は泣き泣き父親の所へ走っていき、口論が始まったと云う。

酔っぱらい達は、父親が保護者としての義務を怠っていたという。”Be a father!”と云う声が何度も聞こえていた。目を離したことも、バーへ女兒を連れてくると云う行為もそのものも、非難されている。

一方、父親は、酔っぱらい達が、娘に触った。そのことで、女兒が恐怖を覚えたことを怒っている。”You touched my daughter! How dare you!”という叫びが響き渡っていた。酔っぱらい達を、女兒への暴力行使や、猥褻容疑で、訴えると云うのだろう。

どちらも手を出すというのではないが、ひとしきり続いた男達の罵りあい、アメリカ社会の様々な面が、あぶり出されていた気がする昨夜のできごとであった。

さて、朝食が終わり、仕事先の大学へ移動。

¹³ <http://blogs.yahoo.co.jp/momo227799/52751645.html>

新しいウールのスーツを着て、ホテルからタクシーに乗ると、運転手が、「Civic Center までですか?」と聞く。「いや、ドミニカン大学までだが」と答えると、「いや、お客さん、弁護士かと思ったんで。そのスーツに黒のビジネス鞆でしょ」と云う。誉められたのか、そうでもないのか、北カリフォルニアで、今日の私のいでたちは、そう見えるらしい。あるいは、犬も歩けば弁護士にあたるアメリカ社会なのか。

● 第3日目 (2012年2月7日)

夜になって降り出した雨が、まだ降り続けている朝の6時。一日雨になりそうな雲行きである。

この冬はずっと乾燥していたので、「恵みの雨」だと地元の人たち云うのだが、California の青い空を夢見て、遠い国からはるばるやってきた身には、勝手な話だが、雨はうんざり。

とは云え、雨のせいか、少し暖かい朝である。コートは要らない。

昨日の夕食は、サンフランシスコに住む中華系アメリカ人夫婦、Jimmy & Susan がホテルに迎えに来てくれ、近くのタイ料理店に。料理はどちらかと云えば、アメリカナイズされたタイ料理で、別に取り立ててどうということもないが、シンハビール¹⁴を飲みながら、友人達と話しに興じる夜が良い。「何を食べるかより、誰と食べるか」が大切と、改めて思い至る。

Jimmy は 1959 年にアメリカへ家族ぐるみやって来た一世で、奥さんの Susan は 1967 年に香港からやってきた、というような話をしたり、福島原発事故の日本経済への影響などを、語り合った。

Susan が、「Jimmy の鼻が変でしょ」と云うので、よくよく見ると、左の鼻翼に傷がある。「エエ、どうしたの」と云うと、「セグウェイ¹⁵って知ってる?」ときくので、「ああ、あの新しく発明された交通手段、2 輪車だったっけ? そのセグウェイが?」

以前からセグウェイに乗ってみたいと思っていた Jimmy が、先月中旬セグウェイ講習会に参加した。基礎的な乗り方を学んだ後、インストラクターを先頭に受講者が列になって坂道を登る練習をする。Jimmy は列の一番後ろだった。

彼の前を走る中年女性が、運転を誤り、坂道の真ん中で突如転倒。これを避けようとした Jimmy は、急ブレーキをかけると同時に、セグウェイのハンドルを急にきる。

¹⁴ Singha, (Thai, correctly pronounced *sing*, but typically pronounced by foreigners as *sing-ha*, reflecting the Latin spelling) or singa, is a 5% alcohol-by-volume (abv) pale lager produced by Boon Rawd Brewery.[Wikipedia]

¹⁵ ◆セグウェイ (商標 Segway) 立ったまま乗って移動するためのバランス自動制御式乗り物。2 輪スクーター。(現代用語の基礎知識 2008)



サンフランシスコの街中をセグウェイで¹⁶.

その瞬間、Jimmy の乗っていたセグウェイはバランスを失う。2 輪車は、Jimmy の頭上を飛び越えて、後方に落下。その際、Jimmy の右顔面を直撃する。起き上がった Jimmy は、鼻から血が噴き出すように滴るので、鼻血だと思い何度もティッシュで押さえる。

実は、セグウェイの部品が、Jimmy の顔を直撃した時、尖端が左の鼻の穴に入り、鼻翼を内側から切り裂いていた。鼻血だと思って鼻翼の上から押さえつけたことで、傷はかえって大きくなった。

救急病院で、医者から、単なる外科手術として、傷口を縫い合わせるだけではだめで、なくなっている部分もあるので、Plastic Surgery¹⁷が必要との診断。つまり、「形成外科¹⁸」的手術が必要。Susan も駆けつけてその場で手術開始。

手術は成功し、保険に入っているので、大した出費にもならず、一段落。しかし、その後しばらくは、顔や右目の腫れが続き、見られた顔ではなかったと、Susan が云う。そして今でも右の鼻翼には傷が残った。

「その日は、13 日の金曜日だったんだ」と Jimmy が云う。確かに今年の 1 月 13 日は金曜だった。「それに」と Jimmy は続ける。「もう 30 年以上も前に、香港でよくあたると云う占い師に、人生

¹⁶ Explore the San Francisco waterfront while riding a Segway. After 30-40 minutes of training on the i2 Segway, head out and see such sights as Fisherman's Wharf, Maritime Park and the Marina Green on this two-hour narrated tour of the city, with plenty of stops for photos
<http://www.goldstar.com/events/san-francisco-ca/the-original-san-francisco-fishermans-wharf-and-waterfront-guided-segway-tour>

¹⁷ plastic surgery: the process of reconstructing or repairing parts of the body, esp. by the transfer of tissue, either in the treatment of injury or for cosmetic reasons. (OAD)

¹⁸ けいせい - げか【形成外科】手術的方法によって、皮膚などの機能の障害や外形の変形を治療する外科の一分野。【広辞苑第六版】

占いをしてもらったことがあって、その占い師の爺さんは、2011年の年末に、大病をするだろうと云っていたことを思い出したのさ」

むろん、中国の新年「春節¹⁹」は旧暦なので、今年は西暦2012年1月23日。13日は、まさに年末である。「大病」ではないが、「大事故」、あたっている。香港の占い師に見てもらいたくなって、「今でも見てくれるかな？」ときくと、「いや30年前でも、かなりの爺さんだったから、もうやっちゃいないだろう」なんだか、中国のお伽噺のよう。

「コージは、いつまでこっちにいるの？」と Susan が聞く。

「水曜にソルトレークへ行って、その後、バンクーバーに寄って帰る」

「じゃあ、残念ね。チャイナタウンの新春パレードがこの土曜日(2月11日)にあるんだけど・・・」

「テレビ中継するから、ソルトレークでも見れるさ」

「とっても賑やかよ」



サンフランシスコのチャイナタウンの新春パレード²⁰

アメリカには何回も来ているが、来る度に新しい顔を見せてくれる。ちなみに、今日までの3日間で、タクシーを利用したのは4回だが、その4台のタクシードライバーの2名が、移民。一人はスウェーデン出身で、ストックホルム近郊の街からスウェーデン資本の会社のエンジニアとしてアメリカに来たが、気に入って住みついたと云う。帰る度に、スウェーデンの寒くて暗いところが、耐えられないと云う。

もう一人のドライバーは、髭面のビルマ人。現在はミャンマー²¹と呼ばれる国である。最近、ヒラ

¹⁹ 【春節】 中国で、旧暦元旦。一年で最も重要な祭日。[広辞苑第五版]

²⁰ <http://www.asianweek.com/wp-content/uploads/2009/02/san-fran-chinese-new-year-parade.jpg>

²¹ Myanmar: a country in Southeast Asia, on the Bay of Bengal; pop. 42,528,000; capital, Rangoon; official

リー・クリントン国務長官が訪問したことがニュースになっていた。これから民主化に一層拍車がかかるだろう。「仏教徒かい？」ときくと、「イスラムさ」と胸を張る。少数民族らしい。

ホテルのウェイターは、メキシコのカンクン²²出身だと云う。時々、何を云っているのか分からないこともあるが、気にもかけずがんばっている。

ホテルから空港へ送ってくれた Town Car のドライバーは、去年もあったブラジル人。無一文でアメリカへやってきて、ピザの宅配から、身を起こした。彼のことは以前どこかでも書いた。

いろいろな人々が、様々な夢を抱いて暮らすアメリカ。今度来るときはどんなアメリカが見えるのだろう。(Wednesday, February 8, 2012)

language, Burmese. Official name (since 1989) Union of Myanmar; also called Burma . (OAD)

²² Cancún: a resort town in southeastern Mexico, on the northeastern coast of the Yucatán Peninsula; pop. 27,500. (OAD)

二度目のカンボジア訪問

室山佳子

来る2月23日、二度目のカンボジア訪問に出かける。目的はCamTESOLへの参加と公立学校訪問である。

今年は、3年生の担任であるがゆえに生徒は家庭研修中であり、高校受験の日程が3月に変更され、こんなラッキーなことはない、と行くことに決めたが、当初はCamTESOLの見学しか考えていなかった。ところが発表へのお誘いがあり、英語の国際会議でのプレゼンなんて縁がないと思っていた私が、ありがたいことに灰田先生、佐藤先生と共に参加することになったのだ。冬合宿で、1回目のリハーサルがあり、今週末、12日に2回目のリハーサルが控えている。25日のCamTESOL本番に向け準備を急いでいるところである。アクロスの活動が少しでも理解されるように頑張りたい。

もうひとつの目的の公立学校訪問もなかなか得られない機会だと思う。前回の訪問時には、ACEなどの私立の英語学校を訪問したが、公立学校は初めてなので、楽しみである。また教科書を贈った学校も訪問できる予定なので、寄付をしていただいた方々に報告することもできるだろう。

Cam TESOL に向けて

佐藤 由美子

2009 年夏のカンボジアツアーに参加した。その時はカンボジアでどんな教育支援が出来そうかリサーチする、という観点でプノンペンとシュムリアップの ACE (Australian Centre for Education) で授業を参観し、先生や生徒達にインタビューをしたり、大人向けのプライベート英語学校を見学したりして、カンボジアの英語教育の一端 (かなりレベルの高い) を垣間見た。しかし公立学校は訪問できず、私の中に「普通の学校で英語を勉強しているカンボジアの子供達」のイメージが描けなかったのが残念だった。

その後沢山の思いが重なって、昨年秋に教科書プロジェクトがスタートした。贈呈式の VTR で見た学校の明るい様子に、これからのカンボジアを支えてゆく生徒達の学びにささやかながら支援できる幸せを感じた。このプロジェクトに到達するまでの道のりを振り返るにつけ、もっともっと発展させたいと思えるものがしっかりした形になりつつある、と大変嬉しく思った。e-dream-s からの教科書を使って日々英語を学んでいる生徒達の姿をいつか見に行こう、とカンボジアが更に身近な、大切な国に思えた。

そんな気持ちで過ごしていた時、CamTESOL の参加者を募る記事を読んだ。教壇を離れて 4 年経ち、今は英語とは関係なく小学校で相談員として過ごしている身では、外国での英語教育学会など敷居が高すぎて及びもつかないと思った。でも、でもあの学校も訪問するというではないか。前回は暑かったけど、今度は 2 月だから少し涼しいかもしれない。年々歳をとってゆくのだから、チャンスがある時に行ってみようか、でもやはり無理かな・・・と迷っている時、塚本さんの「そんなに心配すること無いですよ。色々な国の先生方が集まって来て、発表も多彩で面白いです。Cam TESOL を是非体験して下さい。」という優しいお勧めに、エイッ行って見てこよう！と決心してしまった。

しかし、まず冬合宿の発表素案作りで、英語で発表するのは私が考えていたよりずっと高いハードルだということを思い知った。発表者が灰田さんと室山さんと私の 3 人、と分かった時点で、私は教室の横のほうで複式呼吸や口形の見本をすれば良いのでは、と自分勝手に役割分担をしていた。が、そうは問屋が卸さず、私も体操と呼吸の部分を担当することになった。そこで慌てて今迄 Cam TESOL で先生方が発表された DVD を見、原稿を読み返した。これは日頃のアクロス訓練の意義を再確認できる良い機会となった。

そして冬合宿での発表・・・貴重なアドバイスを沢山顶き、やっぱりそうだなと反省し、大変有難かったです。今はそれを参考にして案を練り直し、カンボジアの先生方に「なるほど、英語教師としてこんな事が必要なんだ！」と目から鱗が落ちるようなインパクトのある発表をしたいと思っている。そして発表が終わった次の日はあの学校を訪問し、生徒達が教科書をどう使っているのか、子供たちの目は輝いているか、しっかり見て来よう。やっぱり暑い方が良いかな、と楽しみを数えつつ寒さを堪えている。

「被災地支援ツアー」への思い

仙崎裕右

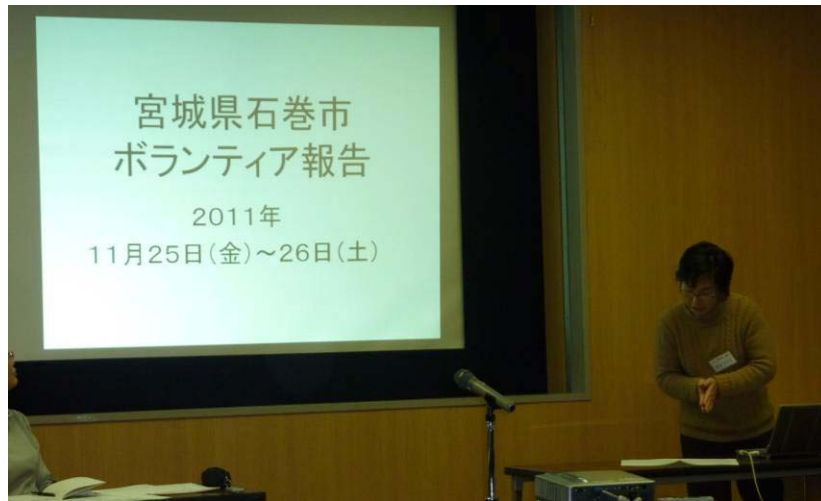
先週の金曜日、以前参加したボランティアバスツアーの集合地点に、家にあった毛布、そして今回用意した使い捨てカイロを届けてきた。このバスツアーは8月以来、ほぼ毎週東北に向けてバスツアーを実施している。過去に参加した人が時折、防寒具や食べ物などをバスツアーの集合地点に持ってくる。それを一緒にバスに積み込み、現地に届けてくれているのである。悪夢の日から約3カ月半、今の自分に何ができるか考えていた中で、少しでも前進をすることができた気持ちがして、うれしかった。「またツアーに参加してくださいね」と声をかけてくれるツアー担当者（実は飲食業界会社社長）の手は温かかった。

昨年10月16日の日曜日。気仙沼のボランティア村のドームの中、他の参加者が和気あいあい、ボランティア活動をしているのを見ながら、激痛に耐え、うずくまっている自分。「いったい、俺は何をしにきたんや？」と何度も同じ問いが頭の中を駆け巡る。その後、ボランティアツアーに参加した参加者の1人が持ち込んだ三線のミニコンサート！？が行われ、地元の方がドームを訪れ、ボランティアメンバーとの交流が進む中、横で苦痛に顔をしかめながら何もできなかった自分。不完全燃焼どころか、点火すらできなかった自分に歯がゆい思いを抱きながら大阪まで帰ってきた。

何かできることはないか、と、夏休みぐらいから考えていた。関東にも大きな影響を与えた今回の震災、ネットで情報を色々集めてみても、見つかるツアーのほとんどが関東発。2泊3日で行ける関東に比べ、バスで15～16時間かかってしまう関西だともう1日必要になってくる。確かに、同じ地続きとはいえ、比べてみると関西は余りに遠い。また、夏休みには比較的多くの、単発のツアーはあったが、10月ともなると、数はぐっとすくなくなってしまう。しかし、前回（8月）の理事会の後のパーティで前に出て話す機会があったが、その際には今回のツアーにたどり着いていた。

元々ヘルニア持ちであったが、現地では順調だった。16時間の長旅も、整骨院のアドバイス通り、2時間おきの休憩では必ずバスを降り、歩き回ったこともあり、不安もまったくなく現地にたどり着いた。しかし、翌朝、メインのボランティア活動を始めた瞬間、腰の爆弾がこれまでにない形で爆発してしまった。あれから4カ月。まだ完全に普通には歩けない。無念さがあの日以来つきまとう。

しかし、今年になって、そんなうつうつとした気持ちに、希望の光が見えてきた。



(e-dream-s 理事会でボランティア活動の報告をする岡田理事)

1月のアクロス冬合宿の会場で行われた第38回 e-dream-s 理事会。そこで新しく被災地へ支援活動を行う計画が発表された。7月の第36回理事会から議題としてあがっていたのだがなかなかまとまっていなかったのが、今回で大きく一步を踏み出した。自分にとっては雪辱を果たすべき絶好の機会である。奇しくも、気仙沼が候補地に挙がっているようなのである。ぜひ行ってみたい気持ちがあるが、同時に不安もある。まだ治っていない自分の体を考えた時、ただの無謀なチャレンジになってしまわないだろうかという不安。正直、参加希望は出しているものの、迷っている。自分の脚の調子と、できる作業を考えながら最終結論を出すことになるが、気持ちは、あの日、時間が止まったままの気仙沼に向かっている。

瓦礫が「撤去」された、とか、ボランティアで「瓦礫撤去」してきたというが、実際には、あちこちに散乱している瓦礫を集めてまとめているだけにすぎない。私が見てきた気仙沼小泉でも、まだ車や鉄骨や線路の跡が固めて残されていた。先月ようやく瓦礫の受け入れ先が決まり、本当の意味での撤去が始まったという。まだ現地では通常の生活に戻れない人たちがたくさんいる。参加したバスツアーのブログ²³ではまだまだ様々なボランティアを求める声がある。子どもたちと触れ合うことや、受験勉強ができない子どもたちのサポートなど、瓦礫撤去以外にも何かできることがあるかもしれない。大震災から11カ月。まだ始まったばかりである。

²³ 「復興ボランティアバスツアーのブログ」 <http://ameblo.jp/volunteerbus/>

新しいプロジェクト

理事 山田昌子

「山田先生、新しいプロジェクトをやってもらいたいんだけど。」2月に入った頃、突然校長室に呼ばれた。転勤してまだ1年が過ぎていないのに、何のことなのか、すぐには校長の意図がわからず、きょとんとした。

来年度、現在勤務している高校が「京都グローバルコミュニケーション校」になった。なんだか格好いいネーミング。実は、文部科学省（以下、文科省）が「英語力を強化する指導改善の取組」という国事業を企画、各都道府県に数校「拠点校」を設けたが、その拠点校を京都ではこの名前で呼び、私が働いている勤務校が拠点校の1つとして取組をしなければならないらしい。

「英語教育の改善」「英語教員の資質向上」と叫ばれて久しいが、現状はそれ程変化していないと思われる。それが、平成25年度の新学習指導要領施行にあたって、「その着実な実施」と「英語使用の機会の大幅な拡充」、「モチベーションの一層の向上」を図る取組をし、拠点校から現状を変えていきたいという意向のようだ。これまでは、英語系や国際系の特定のコースの取組をすることが多かったが、このプロジェクトでは全生徒を対象にするという。具体的には、教員が授業中もつと英語を使用し、生徒には英語を使った言語活動をもっとさせよ、そしてスピーキングを含む4技能の学習到達目標を設定・評価しろ、しかも、お金を出すから、外部検定試験²⁴を活用し、取組がどのように生徒の力を伸ばしたか検証もしろという内容だ。文科省はようやく重い腰をあげたのだろう。

ところが、勤務校の英語科の会議の中では、日常の業務だけでも忙しいのに、余分な仕事が増えたという歓迎されないムードが漂う。「新学習指導要領が、さ来年度施行になるとはいつても、まだどんな教科書を使うのかわからない、それを見てから考えるつもりだったのに、急に言われても、どうしたらいいんだ？」と戸惑いは隠せない。

「4技能を伸ばすことは必要だろうけど、文法力がなかったら何もできない。文法力が後退している現状で、文法を英語で教えるのは、やっぱり難しい！」

「模試を受験しろと生徒に言っている以上、模試に出る文法項目は、それまでに教えておかなければいけないから、ゆっくりやっている暇はない、どうしよう・・・」

「英語を教員が常に話す必要があるとは思えない、日本語でする方が効果的ということもある。それに、大学受験を考えると・・・」等々。

困ったという発言が相次いだ。いくら良いことでも、現実を変えらるとなると容易なことではない。府教委に計画書や予算書を提出するまで2週間もない。私自身、何から始めたらいいのか、自分の

²⁴ 京都府は、GTEC for students や英語能力判定テスト（英語検定）を考えている

授業改善だけの問題ではないので、緊張してしまう。

2月10日、説明を聞くために、副校長と一緒に京都府教育委員会に出張した。文科省は「全英語教員がすべての授業で英語を使用しろ」と言っているそうだが、実際それをすぐに行うのは容易なことではない。府教委もそれは理解し、「生徒の状況を把握した上で、今よりも増やす努力をしてほしい」と柔らかな対応だった。100%ではないと聞き、勤務校の生徒たちの英語理解度を考えると、ちょっとホッとした。

とはいえ、勿論、現在の授業そのままというわけにはいかない。拠点校になったことをチャンスに、より良い方向に変えることができるなら・・・前向きに考えたいと思い始めた。勤務校の副校長先生も「古くなったL.L.教室をCALL教室に出来たらとは思っているんだけど、それが無理でも、せめてインターネットが使える、ウェブ・カンファランス等が出来るようにしたいね!」と、私の提案に好意だった。

まずは、府教委・文科省への書類提出まであと少し、他の同僚の先生方と相談し協力し、新しいプロジェクトにチャレンジしたい! 明るい春、フレッシュなスタートがきれるように!

いつか来た道

塚本美紀



夜明けのワイキキビーチ

インチョン発ホノルル行きの大韓航空機の機内は、例年と違ってほとんどが中国人だった。3年前から1月の下旬、勤めている高校の生徒を引率してハワイに行っている。いつもは、韓国人と日本人で賑わう機内が、今年は中国人でいっぱいである。生徒たちは、「スチュワーデスさんに中国語で話しかけられた！」「私は日本語やったよ！」「私はアニョハセヨーって言われた！」と大騒ぎである。ほとんどが海外に行くのが初めての生徒たちは、座席の前のタッチパネルを操作したり、機内食の写真を撮ったり、入国審査で何と答えたらいいかと練習をしたり、ホストファミリーはどんな人かなあと話しあったりと、忙しい。けれども、先輩たちから「行きの飛行機の中で寝とかんと、向こうに着いたらきついのよ。」とさんざん言われていたことを思い出して、しばらく大騒ぎした後は、一人また一人と眠りについた。

ホノルル空港到着後、ワイキキビーチを少し散策した後、車でホストファミリーが待つ高校に行った。ビーチで見せた開放された顔とは違い、生徒の顔は少し緊張している。ホストファミリーのハグの挨拶で少し緊張もほぐれ、一人ずつ学校を後にした。

学校では、生徒は現地の生徒と一緒に授業に参加したり、日本についての授業を行ったりする。私は生徒が参加している授業の参観をしたり、生徒が行う日本についての授業の手伝いをしたりと、結構忙しい。とはいえ、放課後少し先生方と打ち合わせをした後は、時間に余裕があるので、現地の友人たちと夕食を共にすることにしている。毎晩、懐かしい友人たちと出かけ、美味しいものをいただきながら、いろんな話をするのは楽しい。

初日の夜は、元ALTのご家族にアラモアナ・ショッピング・センターから少し離れた所にある、中華料理のお店に連れて行ってもらった。元ALTはカリフォルニアにある大学院で勉強していて

ハワイにはいないのだが、毎年ご家族がホテルまで迎えに来てくれて、食事を一緒にしている。末っ子で、今年からハワイ大学に通い始めたSが、その日は同席していないすぐ上の姉のCに、このレストランで食べるべきものは何かと、スマホでメールのやり取りをしている。このレストランはCのお気に入りらしい。「この子ったら、片時もスマホを離さないのよ。今時の子よねえ。」とお母さん。少しアメリカナイズされてはいるが、美味しい中華料理をいただきながら、ハワイへの中国人旅行者が増えたことなどを話した。お父さんの話によると、これはビザなどが緩和されたためという。とはいえ、このレストランには中国人観光客らしき人たちはいない。



P.F. Chang's China Bistro ちょっとおしゃれな中華料理店

http://blog.tabista.jp/manapua/2006/11/p_f_changs_china_bistro.html

三日目の夜は、交流校で私たちの受け入れを一手に引き受けてくれている日本語教師のRと前任校で一緒だった元ALTのPとフランス料理を食べに行った。偶然にもRとPは夫婦で、この偶然を私はとても嬉しく思っている。Pが連れて行ってくれたのは、ダウンタウンから少し離れた場所にある会員しか入れない場所で、新聞社で働くPはそのクラブのメンバーだという。館内では、ハワイには珍しく、ジャケットにタイの紳士や、シルクのドレスに真珠やダイヤのネックレスや指輪をたくさんつけたご婦人方が、談笑していた。クライアントを接待する機会の多いPは、気の利いた場所を良く知っている。最近では新入社員の採用も関わっているという彼は、候補者のことをフェイスブックで調べると、あまり感心しない写真やコメントが結構出てくるといふ。「若い人は、ネットの怖さをわかっていないね。こんなことを言うのは、僕がもう若くない証拠かな。」などと話していると、大学院を出たばかりで来日した当時から、もう10年以上も時間がたったことを感じるが、こうして今でも楽しく会話ができるのが嬉しい。



The Pacific Club このロビーの向こうがレストラン <http://www.worldbloggers.jp/blog/details/view/blog/71/article/190/>

最後の夜は、勤務校のかつての同僚である元ALTのMとKが、ダイヤモンドヘッドの麓にある、カジュアルなお店に連れて行ってしてくれた。カウンターで食べ物と飲み物を受け取り、アウトドアのテーブル席で風にあたりながら、ちょっと早い夕食をいただいた。去年二人目を出産したMは、ちょっとセクシーな美人であるのには変わらないが、子供たちに接する時は、すっかりママの顔だ。ハワイ大学でマーケティングの仕事をしているKは、最近友人と一緒に週末起業したとのこと。コミュニティの活動を支援するための会社らしい。ハワイの最近の経済状況はどうかと聞くと、少し持ち直してきたかな、と言う。



Diamond Head Market & Grill 地元の人で賑わっている

http://www.hawaiimagazine.com/blogs/hawaii_today/2009/6/29/Hawaii_food_restaurants_locals_eat

今回一緒に引率した同僚は、海外旅行が二十数年ぶりということで、何を見ても喜んでくれて、一緒にいて楽しかった。「現地の人たちに、連れて行ってもらわんと、こんな所は来れんよねえ！」「現地の人やけ、こんなこと知っとるんよねえ！」といつも嬉しそうにしてくれるので、一緒にいる私まで楽しい気分になった。海外で現地の人たちと触れ合う楽しさを教えてもらったのは、ACROSSのアジアツアーから始まり、e-dream-sの様々な海外での企画だ。こんな楽しさを教えていただいたことに本当に感謝しているが、今度は人にもその楽しさを少しは伝えられるようになったことが嬉しい。同僚を見ていると、アジアツアーに初めて参加して、ワクワクしていた20年以上前の自分を思い出した。

最終日、私たち引率者はホテルからタクシーで空港に向かい、ホストファミリーに送られてくる生徒たちに会うことになっていた。その時に乗ったタクシーの運転手に、「去年と比べて、中国人旅行者が多いのにびっくりしました。」と私が言うと、「アメリカもそうだし、日本もそうだろうけど、世界中の経済がうまくいってない中、中国の一人勝ちだもんな。いや、インドも頑張ってるけどね。でも、中国人がいっぱい来たところで、ハワイの経済にはあまり影響がないんだ。だって、彼らは、パックツアーで来るから、中国の旅行代理店にお金を払い、中華航空でやってきて、旅行代理店が手配したバスで中華料理店で食事をするんだからね。俺たちには少しもお金をおとしちゃくれないよ。」「かつての日本もそうでしたね。」と私が言うと、「そうそう。俺は80年代に貸し切りバスの運転手をしてたけど、日本人観光客をたくさん乗せて、ショッピングに連れて行ったもんだ。でも、今の日本人はお客さんのように、こうして個人でやってきて、タクシーに乗ってくれる。日本人はいいお客さんだ。」と笑う。今の中国の姿とバブル経済を謳歌していた頃の日本の姿が少し重なって見え、この20数年間自分が経験した変化などを、運転手と話しながらぼんやり考えていた。彼はパキスタン出身。中国やインドはどんどん発展しているが、自分の母国であるパキスタンの発展はまだまだだと言う。パキスタンの人たちが、大挙してハワイに押し寄せる日は来るのだろうか。

空港に到着して、しばらく待っていると、生徒たちがホストファミリーに連れられて続々とやってきた。すでにカウンターの前には長い列ができていたので、一刻も早く生徒を並ばせたいと思う私の横で、生徒はホストファミリーとハグしながら、涙の別れををしている。これも私がいつか来た道だ。毎回のことで慣れていくはずなのに、もらい泣きしそうになってしまう。もう随分昔、初めてホームステイしたホストファミリーとお別れするのがつらかったことを思い出す。「大学生になって、また会いに来たらいいじゃない！」と言いながら生徒の背中を押して、列に並ばせた。生徒や同僚や中国人観光客の中に自分の姿を見て、かつての自分を思い出したりするなんて、私も年をとったのかなと思う。でも、「いつか来た道」を懐かしがるだけではなくて、これから進む道もちゃんと見たいと思う。そんなことを考えながら帰国した。

編集後記：e-dream-sではいろいろな経験ができる。自分が直接体験するだけでなく、他のメンバーが世界各地やそれぞれの場で行動したこと、感じたこと、考えたことを紙面、いや画面上で共有できることも嬉しい。(岡田かおる)